



中高生とともに差別と闘う

『誰かの「ひとこと」』

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



夏の思い出

前々号で予告した通り、濃い夏休みとなりました。人権を語り合う中学生交流集会、人権こども塾豊島一泊研修、広島平和記念式典研修……。すべてをお伝えすることはできませんが、まずは最後の中学生集会について。どうぞ、しばらくおつきあいください。

*

「今回で最後となる中学生交流集会、本当に寂しい思いです。この交流集会や全体学習のおかげで、私の人権学習は変わりました。語り合う人権学習を実践すること

で生徒の表情は変わりました。そしてポツリポツリと語り始める心の声こそが、お互いの考えや思いを変えてくれることを実感しました。「きつとこの自分の思いを分かってくれる人はいら」という思いで自分を語ることで、語った人も、それを聞いた人の心も救われていく。そして互いに幸せに近づいていきました。そんなことを教えてくれた交流集会に、心から感謝します。交流集会は終わっても、人権学習への思いのある先生方、そして生徒の皆さんの活動は、きつと別の形で実現していくのではないかと思います。今日、徳島に来て、皆さんの言葉を聞いて、心が温まりました。本当にありがとうございました。」

*

集会が終わってすぐに届けてくださった方の感想です。「語り合う人権学習」の意義をよく分かっておられます。そして今回も、幸

せが感じられる、深く考えさせられる集会となりました。

共感がつくる語り合いの輪

集会午前の講演会パネリストは、本集会で育ってきた高校生三人であり、人権こども塾生です。

その一人目、高校二年生Aの語りは、「献血について」でした。彼は昨年度もパネリストとして登壇していたので二回目ということになります。が、なぜ献血？

*

「今回が三回目の参加になりました。毎回子どもたちの熱い思いを受け、とても心が熱くなります。今回は最後ということで、今までの集大成ともいえる内容でした。その中でも、私はパネリストのAさんの話がとても印象に残っています。私はこれまでに献血を五十四回してきています。若い頃から献血をするのが大好きで、誰かの役に立っているという気になるからだと思います。」

私の娘も生後六か月の頃に川崎病にかかり、血液製剤を投与しました。同じような経験をしたが、娘に何も伝えていない自分がとても恥ずかしく感じました。献血によって助けられた命のことを、もつと娘に伝えなくてはならないと強く感じました。そして娘にも、Aさんのように感謝の気持ちをと願ってしまします。これまで献血してきたことは間違っていないと強く思いました。自分の

血液で助けられる命があるなら、本当に嬉しいことです。

たくさんの子どもたちが自分の思いを語っている姿には感動です。自分のことを、自分の人生を楽しむように満ちた笑顔で話す姿には、言葉で表すことのできない感動があります。そのように自分のことを話せる子どもを育てるよう、今後も支援していきたいと思っています。」

*

Aは、幼少のときに罹った川崎病が献血によって助けられたという話をしました。そして会場全体に、「献血に行きましょう！」と呼びかけます。すると、やはり当事者の呼びかけの力は絶大ですね。そもそも注射自体が怖くてできなかったという子が、「大人になったら献血に行く」と発言します。ある大人は、「我が子も川崎病だったけど、血液製剤によって助けられた」と応えます。ある中学生は、「自分も川崎病だったが、今日の話を聞いて、誰かの献血によって生かされたことを初めて知った。感動した。自分もいつか誰か人の命を救いたい」と返します。

誰かの「ひとこと」

誰かの「ひとこと」が、出会はずのなかった出会いを生んでいきます。それもこれもすべて、誰かの「ひとこと」から始まるのです。とりわけ当事者の声は、ひととき大きな輝きを放ちます。そしてその輝きに触発され、共感が

語り合いの輪を作っていくのです。

昔、私のパートナーが、「被差別部落の子の集まりは大切に必要」と言い切ったことがありました。それは、他の子たちと壁を作って集団づくりをするということではなく、オープンな仲間づくりを進めつつ、自分と同じアイデンティティを持つ仲間とのコミユニティも必要だ、ということでした。なぜなら、やはり同じアイデンティティにしか分からないこともあり、そこで学び得られることもあるからということです。

どうしてそんなことを言い出したのかというと、実は私たちの子どもはひどいアトピー性皮膚炎でした。毎晩のようにかゆいところをかきむしり、やめるように押さえつけると暴れて泣き出し、泣き疲れてようやく眠りについたかと思えば、朝には指先も体も血だらけ。そんな我が子の姿を見て、途方に暮れたと思います。我が身も責めたと思います。だからこそ、当事者には当事者にしか分からないことがあり、その悩みや苦労、また対応策については、同じ立場だからこそ分かり合えるし、共有すべきことがあると言ったのです。なるほど、でした。川崎病についても、こんなに小さな集会で幾人も共有できると思いませんでした。「仲間がいる。ひとりじゃない」と思えることがどれだけ心強いのか。出会はずのなかった出会いが、ここにもあったのです。(つづく)